

平成22年4月6日、第34回あるべき税制委員会が経団連会館で開催されました。今回は、「スウェーデン税制について」内閣府松元崇さんからお話をいただき、議論を行いました。資料は別添です。

（話の概要）

- ・高福祉で知られるスウェーデンの国際競争力は日本よりも高い。スウェーデンには最低賃金法がない。スウェーデンでは逆進性の議論が聞かれない。そんな中で、格差の少ない社会を創り出しているのがスウェーデン。それは日本人にとってパラドックスそのものの世界である。
- ・戦後、格差の少ない豊かな社会を実現したのがスウェーデンと日本であるが、スウェーデンと日本を比較すると、スウェーデンでは、生産は小さい政府の下に、生活は大きな政府の下に行われている。日本では、生産も生活も小さな政府の下に行われてきたが、それは企業の生活保障に依存（小さな政府と大きな企業）してきたためだ。グローバル化の中で企業の生活保障機能が低下し格差社会が出現している。
- ・ソ連邦をはじめとして生産を大きな政府の下で行おうとした社会主義経済は失敗した。生産も生活も大きな政府の下で行おうとした戦後の英国も失敗した。スウェーデンは英国が行ったような国有化を行わなかった。ここに成功の秘訣がある。
- ・スウェーデンの競争力の背景にあるものは、一国の国民は、国内で創り出す付加価値以上の生活はできないということ、成熟経済の経済成長のためには活力ある生産性の高い個人を生む生活の場が不可欠であるということである。活力ある生産性の高い個人を生む生活の場を国が保証しているのがスウェーデンである。
- ・自助の延長線上にある公助という考え方。スウェーデンの社会保障で生活保護の占める比率は低い。スウェーデンの社会保障は「自助の延長線上にある公助」。そのことが高い税負担を受け入れる背景にもなっている
- ・長期間にわたる試行錯誤の末に出来上がったのが今日のスウェーデン。積極的労働市場政策は、当初人々を従来の生活基盤から切り離して転職を強制する非人間的な発想と非難された。1980年代には「第3の道」としてサッチャリズムの影響を受けた政策も行われた。試行錯誤の歴史である。

以下の議事録本文は会員用メールマガジンで配信いたします。